

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

ルカが伝えた「良い知らせ」

——ルカ伝福音書 訳述——

川上直哉

さて、あの有象無象（うどうむどう）の人々がイエス様の所に群がり、その神の言葉を
耳にしていた頃の出来事をここに記しましょう。

イエス様はゲネサレ地方の湖に立って、近くに二艘の小舟があるのを見ておられました。
漁師たちは小舟から陸に上がり、網を湖で洗っていました。イエス様は、その二艘の内の
一艘に乗り込みました。それはシモンの舟でした。イエス様は、少し沖へと連れて行って
くれるようにシモンに頼みました。そうして、イエス様は湖に浮かぶ小舟の中に座り、群
集を教えられたのでした。

お話を終えた時、イエス様はシモンに言いました。「深い所まで、舟を出して下さい。
そして、そこで網を下ろしてみてください。魚が取れると思いますよ。」

シモンはイエス様に答えてこう言いました。「先生、夜通し、私たちはここで働いたの
です。でも、何もかかりませんでした。まあ、それでも、先生がそうおっしゃるなら、や
ってみましょう」

やってみると、その網には物凄い数の魚がかかりました。網はもう、破れてしまうかと思
うほどです。シモンとその仲間は、小舟の中で、もう一艘の舟に合図をしました。手伝

ってもらわないと、とても網を引き揚げられないのです。岸から仲間がやって来て、網をどうにか引き上げますと、二艘の小舟は魚でいっぱいになって、沈むかと思うほどになりました。



イエス様と一緒に小舟に乗って、間近にこの出来事を見て、シモン・ペテロはイエス様の膝のそばに土下座をして、こう言いました。「私から離れてください！私は全くどうにもならない罪びとなのです！主よ！」実に、シモンは恐怖に頭から爪先まですっぽり包まれてしまったのです。この恐怖は、そこにいた他の人々も捉えて行きました。そこにはヤコブとヨハネというゼベダイの家の息子たちもあり、シモンと一緒に働く仲間でした。この二人もまた、シモンと同じように恐怖に包まれました。イエス様はシモンに言いました。「恐れるな。今からあなたは、人を捕らえる人になる。」彼らは舟を陸につけてから、すべてをそこに置いたまま、イエス様について行ったのです。

ユダヤの都市にイエス様が行かれたときの出来事をお話ししましょう。

ある都市に、なんと、「癩（らい）」と呼ばれた恐ろしい伝染病に体中が覆（おお）われた人がいました。この伝染病は、体の皮膚を溶かして行く恐ろしいものだったのです。体中が爛（ただ）れたこの病人は、イエス様を見て土下座をし、祈り願ってこう言いました。「主よ！あなたであれば、お心のままに、私のこの腐った体をきれいに清くすることがおできになります！」それでイエス様は、その手を伸ばしてその病気の身体を触り、言いました。「私の心は、こうだ。さあ、きれいに清く、なりなさい。」途端に「癩（らい）」と呼ばれた病気はこの病人から離れて行きました。

イエス様は「誰にも、この事は言わないように」と、きれいに清くなったこの人に向かって、厳しく命じました。「ただ、きれいに清くなったことを、祭司たちに見せて、旧約聖書以来の宗教儀礼に従って、もう穢（けが）れていないことの証明をもらってきなさい。そうして、世間に戻るのですよ。」

このことをきっかけに、やはり、イエス様の噂は、いよいよ広く伝わって行きました。有象無象の人々は、こうして、いよいよ群がってくるようになったのです。この人々はイエス様の言葉に触れ、そして、その病を癒されて行ったのでした。

それで、イエス様は荒野へ引き上げて行きました。祈るためでした。

またこんな出来事もありました。



ある日のことです。イエス様が教えている場所に、「ファリサイ（分離）派」と呼ばれる人々と「律法学者」と呼ばれる人々も来て、座っていました。この人々は教師であり、学者であり、ジャーナリストであり、弁護士であり、つまり、正義の味方として人々のために努力する知識人たちでした。そして、ガリラヤと、ユダヤと、そしてエルサレムの全ての村々から、人々が集まってきていました。「主」と呼ばれる聖書の神の力が臨み、イ

イエス様に癒しの業を続けさせていた頃のことでした。

そうした人々と一緒に部屋の中にいたイエス様に、なんと、天井から砂がどんどん降り注いできました。

数名の男の人が、一枚の板を運んでやってきていたのです。その板には、寝かされた一人の人が載せられていました。その人は体が麻痺していたのです。なんとか、イエス様の所に行こうとしましたが、家の中は人でいっぱい、入り口には入り込む隙間もありません。そこで、やってきた人々は屋根に上り、そして板ごと病人を屋根に持ち上げてから、屋根をはがし始めたのです。

屋根を通過して、イエス様たちがいる部屋の中に、板が下ろされてきます。その板の上には、一人の病人が寝かされています。砂だらけになりながら、部屋の中の人々は、その板を見上げ、そして病人を見咎めて行くことになりました。病人は、麻痺に悩んで板に寝ています。どんな厳しい眼差しを向けられても、それを躲（かわ）すこともできません。ただ、「いいこと」をしているつもりの方々が、有無を言わず、天井の上で汗を流しているのを見つめるばかりです。

イエスさまも、天井の上を見上げました。そこにいる方たちの、その優しい、でも愚かしい、ただひたすらなだけの真心を、イエス様はじっと見つめました。イエス様は視線を天井の上から外さないで、こう言いました。「病気で苦しんでいるあなたに言う。もう、大丈夫だ。だれもあなたを責めたりはしない。神さまも、これでいいとおっしゃる。これで、いいのだ。」

それで、正義の味方の人々である「ファリサイ（分離）派」の方々が、互いに論じ始め、こう言いました。「神さまが、これでいいと言っている？——何を言っているのだ。罰当たりな事、けしからんことだ。まさか、神でもあるまいに！」

イエス様はそれを聞き、こう答えて言いました。「なぜ、論じ合っているのですか。何を心の中で自問自答しているのですか。いいですか、ここで、この人に『大丈夫、それでいい』と言ってあげることと、麻痺の身体に向かって『起き上がり、歩け』と言うのと、どちらが簡単な事か、あなたたちは、分かっていない。実に、神ではなくて『人の子』と呼ばれる私こそが、この地上において、全ての人に『大丈夫だ、それでいい』と言ってあげられるのだ。そのことがはっきりと分かるためには・・・」

そう言うってから、イエス様は板の上に寝ている人に目を向けて、こう言いました。「私は、はっきりとこう言う。さあ、起きなさい。そして、この板をもって、家に帰りなさい。」するとすぐ、人々の前で、この病人は立ち上がり、その板を持ち上げて「神様はすごい！」と言いながら、家へと帰って行きました。

そこにいた全ての人々は我を忘れ、皆口々に「神様はすごい」と語り、そして恐怖に包まれて「今日、私たちは、奇跡を見たのだ」と語り合ったのでした。

この出来事が起こった部屋を出て、イエス様が進まれると、そこに税の取り立て屋の屋台が出ているのが見えました。この時代、世界の半分を支配するローマ帝国は、その軍事費を調達するために、各地のやくざ者を雇い、ローマ帝国軍の威力を使って強制的に税金を徴収するようにしていました。そうすると、各地の人々の怒りは、その土地のやくざ者に向けられ、ローマ帝国への怒りは分散します。そうして、この税の取り立て屋もまた「非国民・裏切り者」として憎しみの対象となっていました。憎まれ慣れた取り立て屋は、いよいよ、虎の威を借る狐のようになります。ローマ帝国が課してくる税金よりも多い金額を人々に請求し、差額を懐に入れ、そのお金で友達を作り、日々を過ごしていました。

あの天井の上にいた人々の愚かな真心を見つめたイエス様は、同じ目で、この税の取り立て屋を見つめました。この取り立て屋はレヴィと言いました。屋台に座っているレヴィに、イエス様は声をかけ「私と一緒に、呑みに行こう」と誘ったのでした。その声を聴くと、レヴィはすべてを屋台に残して立ち上がり、イエス様について行きました。そして宴会が始まります。穢（けが）れた大金持ちのレヴィです。すぐ、自分の家で支度をさせて、やくざ仲間を呼び出して、それはそれは盛大な宴会となりました。

宴もたけなわとなり、みんながくつろいでいるところに、正義の味方である「ファリサイ（分離）派」の人々がやってきました。イエス様の弟子に、こう言って責めました。「なんだ、こんなやくざ者たち・こんな穢（けが）れた連中と。よく、楽しそうにお酒なんか飲めるものだな。」イエス様は、上機嫌で、これに答えて言いました。「いいかね。健康な人々は、医者が必要ないんだ。でもね、病人は、医者が必要としている。正義の味方の皆さん。私はあなたたちを呼んでいない。そうではなくて、このロクデナシの穢れた連中を仲間とした。この連中が、心をさっぱり切り替えて、憑き物のような悪いものから解放されるためにね。」

正義の味方の人々は、イエス様にこう言いました。「あなたのお師匠・ヨハネは、すごい人だった。その弟子たちは、厳しく身を律し、断食し、祈りの中で過ごしていた。私たちの弟子も、そうしている。それが何だ、あんたの弟子たちは。このだらしない様子。食べ、呑み、騒いでいる。」イエス様はこれにこう答えました。「花婿が一所にいる時、結婚式の披露宴で、お客は断食などしない。ご馳走を喜んで食べ、できるだけ上機嫌で過ごすものだろう。今は、その時だ。しかし、その婚宴のただ中から、花婿が奪い去られる時が来る。その時こそは、この連中も、ぱったり元気をなくしてしまい、何ものどを通らなくなる。断食するのは、その時だ。」

そしてイエス様は、この正義の味方たちに、もっとよく分かるようにと、ふたつのたとえ話をしてあげました。「新しい服にはさみを入れて布を切り出し、古い服の継ぎ当てに

する人は、いないでしょう。そんなことをしたら、新しい服はだめになってしまうし、古い服もおかしくなってしまう。同様に、発酵激しい新しいぶどう酒を、堅くなった古い革袋に入れる人は、いないでしょう。そんなことをしたら、ぶどう酒から出る気泡によって、革袋が張り裂けてしまうにきまっているのだから。」そして、手許（てもと）のグラスを手にとって、ワインの香りをかいで、上機嫌でこう言いました。「こうしたいい酒、古いぶどう酒は、いいものだ。これを飲んだら、新しいぶどう酒をくれと言う人は、まあ、いないだろうな。やっぱり、古いものもいい、と、まあ、そう言うだろう。あんたたちは、なるほど、そういう事なのさ。それは、それで、分かる。でも、よく考えてみた方がいいぞ！」

ある「休み」と定められた土曜日のことです。イエス様が麦畑を通ることがありました。イエス様のお弟子さんたちが、麦の穂を手で摘んで、その実を手で揉んで殻を外し、食べました。そこで何人かの「ファリサイ（分離）派」と呼ばれる人々が言いました。「今日は『休み』と定められている。『今日してはいけないこと』を、あなたたちはしている。どうしてそんなことをするのか。」イエス様の国の法律では、それは「貧困対策」として、合法なこととされていました。ただ、「休み」と定められた日に「脱穀」をしてはいけない、みんなでストライキをして、ローマ帝国に抵抗するのだ、とそのようなも、申し合わせていました。それで、正義の味方である「ファリサイ（分離派）」としては、チームワークを乱さないように、厳しく注意した、叱りつけた、という次第だったのです。

そんな正義の味方の「ファリサイ（分離）派」の人々に、イエス様は答えてこう言いました。「あの英雄ダビデがしたこととして、旧約聖書に書いてあることを知らないのですか。――ダビデとのお付きの人々が空腹だった時、彼は神の家に入り、そこにあったパンを食べ、お付きの者にも与えた。それは『してはいけないこと』であった。それはただ、祭司だけが食べてよいものであった。」

そしてイエス様はこう言ったのでした。「休みの日の主（あるじ）はだれか。誰のために、休みの日はあるのか。『人の子』と呼ばれる者、つまり私のために・おなかをすかせた人のために、休みの日はあるのだ。」

また別の「休み」と定められた土曜日のことです。イエス様が公民館に入ることがありました。イエス様は大人の学習会に参加している人々の中に入って、いろいろな事を教えていますと、そこに一人の人がいました。その人の右の手は萎（しな）びていました。その時、そこに、イエス様をじっと見つめる目がありました。「ファリサイ（分離）派」と呼ばれる人々と「律法学者」と呼ばれる人々の目でした。今日は「休み」と定められた日

です。そして、ローマ帝国にみんなで立ち向かう、大切な日です。「スト破り」をして病人を癒すのではないかと、イエス様を監視する目が、そこにあったのです。「ここでイエス様を告発してやろう」と無言のうちに話し合う声を、はっきりと聞き取った上で、イエス様は右手が萎えている人に向かって言いました。「さあ、立ち上がりなさい。そして、みんなの真ん中に立つのです。」

そしてイエス様は、自分を厳しく見詰めている人々に向かって、このように尋ねて言いました。「ひとつ、伺いたい。『休みの日』と定められた日に許されているのは、良いことをすることか。それとも、悪いことをすることか。助けることか。それとも、めちゃくちゃにすることか。」

イエス様を見詰めていた厳しい目を、一つずつ、イエス様は見詰めながら、手の萎えた人に言いました。「あなたの手を伸ばしてごらんなさい。」

すると、その人の手は伸びたのです。すっかり、元通りになっていました。それを見ていた人々は、すっかり、何が何だか分からないような思いに包まれてしまいました。そして、互いに「これは大変なことだ。」「こんなことをされて・・・」「放ってはおけない。」「何とかしなければ」と、口々に語り合い始めたのです。

